フィールド(現場)からの風 ⑩

宮田守男

98オリンピックで培った地域の財産は何なのか改めて考えて見ませんか

2014年ソチオリンピック開会式を迎えた日の夕方、白馬村内で行われた白馬村オリンピック課・オリンピック競技課同窓会に参加した。98冬季オリンピック・パラリンピックの行政組織で一緒に運営に携わったメンバーだ。

当時世界的な規模の祭典を白馬村の職員だけでは対応できず、国・県、大北地域の市町村や民間から職員派遣をしていただいた。誰もが始めて経験する業務だった。スケジュールが決まった業務で、毎晩残業が続き、苦楽を共にしたメンバーだ。組織を解散した後も冬季オリンピック開催年ごとに集まって当時を思い出しながら語らいあっている。

当時の体験は16年たった今でも鮮明によみがえるが、メンバーは年相応に時間が経過し、お互い顔を見ながら苦笑い。メンバーには故人となった者や既に退職した者も、次回の冬季オリンピック開催時も会えればと心に誓う。

自分たちの所属を離れて、全く異次元の環境での業務から、従前の業務に慣れる苦労をしたかと思うと本当に頭の下がる思いだ。現在は、各市町村の中核的職員で活躍していると聞く、これからも頑張ってほしい。また白馬村も、各市町村の協力を忘れないでほしいと願っている。

今回のオリンピックでも、スポーツ以外の観点での情報がマスコミをにぎわしている。テロ攻撃の脅威の影響で厳しい入場管理がされ観戦もままならない。ホテルがいまだ完成していない。トイレ便器が1部屋に2つ付いているなど次々情報発信されてくる。

98オリンピックの準備期間も社会部紙面での報道に振り回された。オリンピックテスト大会でも、オリンピックと同じ対応を求められ、新聞等の社会面で厳しく指摘された。オリンピックの野外競技の施設は、仮設施設が基本だった。当然経費面でテスト大会は限られた経費で行われた。仮設トイレの数も限られ、観客誘導の手段も限られていた。満足な対応ができないことを前提としたテスト大会の業務の最前線を担っていたのも、今回集まったメンバーだった。そして予想したとおり厳しい報道の洗礼を受けたメンバーは矢面に立たされた。報道の役割を否定するつもりは無いが、深く視野を広げて報道してほしいとの思いをいまだに忘れることはできない。

同窓会で参集した他の市町村の職員から、当時の思い出話で盛り上がる。当時私は、オリンピック競技課長だった。男子アルペン競技・女子アルペン競技・複合競技・クロスカントリー競技・ジャンプ競技・パラリンピック競技の担当部署が分かれ、総勢26名の編成だった。業務量も膨大で、各部署の係長が実質の課長的な責任を担ってもらった。

私は、スキー連盟などの対外組織との調整と、テスト大会を国際連盟に国際的に評価してもらうために必要な資金確保に奔走していた。行政の職員から見て、その行動は異様に映ったと話しかけられた。課長でありながら席を外している時間が多く、相談したいがいつも不在と度々お叱りをいただいた程だ。

課のあった「ふれあいセンター」の三階フロアには、大会を盛り上げるために立ち上げた実行委員会が同居し、一目見て行政職員では無いと分かるスタッフが日増しに増えていった。即断即決の場面も多く、熱が入り大声で言い争うことも度々だった。スポンサーの協賛金の依頼など特殊な業務内容で、皆心配しているなと感じ取った日々の連続だった。16年たった今でも覚えてくれていた事は驚きだった。

当時白馬村内で開催された各種大会に協賛いただいた企業は、今も業績が気になり注目しているが順調な業績を聞くと、うれしく思う自分が今もいる。単に損得勘定ではない世界がそこにあったことは事実だ。小さな村のイベントに誠意を持って対応していただいた。当時の担当者も各企業の責任あるポストにおり、親交を続けている者も多い。「何か、またやりたいね」との話をする機会もあり、それほどお互い充実した時間を過ごしたのだろう。

開催されているソチオリンピックも大会の裏方でどんな展開がされているのだろうかと思いをはせてしまう。日本選手が優秀な成績を収め、無事成功裏に大会が終了することを願いながら、毎日楽しみながら応援したいと思っている。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）